No. 27

汗で滑りが悪くなったパウダー

背部清拭用のパウダー

看護用品にまつわるエピソード

当時の病棟ではモーニングケア，イブニングケアが徹底していた。朝は，温湯で手洗いや洗面をさせ，歯磨きをさせた。イブニングケアでは背部清拭後パウダーをつけて背部マッサージをした。クーラーのない時代だったので，患者も看護婦も汗びっしょりになり，パウダーが湿ってすべりが悪かった。

当時は，本当に看護をしていた感じがした。看護学生の実習スケジュールは病棟で組まれており，実習時間が多く全学生が一斉に休みの日はほとんどなかったと思う。病棟の看護婦の数は少なかった。教師の都合で休講になる場合は病院実習になった。その時はとても嫌だった。病院実習に戻る前に逃げ出して映画を見に行ったことが何度かあった。看護学校の近くに映画館があり，拡声器で音声が流れていた。

その後，医療の高度化と共に患者が重症化してきて，だんだん病棟の看護師がケアをしにくい環境になってきている。ベッドサイドに行くものの診療の補助業務が多くなり，看護ケアに費やす時間が少なくなり，最近の看護師は細かいことができなくなったと思う。忙しくて時間がないと言うが，ケアは普段からやり慣れていないと時間があってもできないと思う。以前は看護計画という形はなくてもケアの計画自体が看護婦個々の頭の中にあったが，最近はケアを計画的にやらないと実施しにくくなってきている。また，例えば導尿の時に簡単な消毒で実施したり，排泄の時に敷物を敷かずに介助したりなどの省略が見られる。わかってはいて省略しているのかそれとも気づかないのかはわからないが。

（備瀬信子氏他，2004）

解説

かつては看護をしている実感があったと語る看護者は多い。点滴をしている患者も少なく，人工呼吸器を装着している患者もほとんどいなかったことから診療の補助的な業務が現在ほど多くなく，看護ケアに時間をかけることができていた。看護ケアの担い手は看護学生が中心で，上級生になると夜勤実習もあった。

ワーターワース女史をはじめ当時の USCAR の米国看護指導者たちは，率先して徹底した看護ケアのモデルを示した。1951 年に沖縄中央病院にモデル病棟が設置され，県内の病院から選ばれた 30 名の看護婦が３か月間の看護研修を受けている。今で言う継続教育である。受講生が学んだことは県内各地の病院に持ち帰られ，看護ケアの徹底が浸透していったと考えられる。看護ケアに必要な物品は看護指導者によって調達されていた。

（嘉手苅英子，2004）